【広報文化財コラム「一宮の歴史特集」】㊺

令和4年12月号

一宮町の歴史特集「上総広常の実像を探る（20）」

東上総における広常の居城跡と伝わる場所、二か所目は一宮町の高藤山城跡です。

山頂には文久2年（1862）に当時の一宮藩主であった加納久徴が建立した「古蹟の碑」が建てられ、城跡とともに町の史跡に指定されています。

高藤山城跡についてはすでに指摘されているとおり、その縄張り（城の構造）から、戦国時代後期の城であると考えられています。

この城跡が広常の居城跡だという伝承はすでに江戸時代中期、加納家が一宮を領有するときにはあったようです。

また、広常の居城であるという根拠史料とされたものが「安養寺過去帳」です。ここに①「上総院殿大谷安養居士」、②「一之宮高頭城主上総之助」とあり、②高藤山城主は上総之助＝上総広常であり、①が広常の戒名だ、と解釈され、戦後に編さんされた『一宮町史』や『睦沢村史』でもこのように解釈されています。

ところが、今回広常に関する広域連携事業を進めていく中で、この過去帳を確認したところ、ここに記載されている「上総之助」は、広常とは別人の、戦国時代の人物である可能性が高いことが判明しました。江戸時代に山頂に石碑を建てた一宮藩の関係者は、この原本を確認していないのではないかと考えられます。また『睦沢村史』などを執筆した方も「安養寺過去帳」に記された「上総之助」は広常であるという先入観のまま、史料を誤読した可能性があるのです。

つまり、最新の研究成果では、高藤山城跡は広常の居城ではない可能性が高い、ということになります。ただ、高藤山城跡は遺構がよく残っており、戦国時代の城という観点で見ると、良い山城であるといえるでしょう。そしてまた、郷土の歴史を後世に伝えようと建てられた石碑も、当時の人々の思いを今に伝える、重要な史跡であることは間違いありません。

▲高藤山城山頂の堀（一宮7473）

（学芸員　江澤一樹）

【問合せ】教育課　☎（42）1416

令和5年1月号

一宮町の歴史特集「上総広常の実像を探る（21）」

東上総における広常の居城跡と伝わる場所、三か所目は睦沢町の大柳館跡です。

大柳館跡は、上総千葉氏が本拠とした館で、宝治元年（1247）の宝治合戦で上総千葉氏が滅亡した際、当主の秀胤を始め一族が同館に立てこもり、火を放って自害したといわれています。

大柳館跡には特に広常にまつわる伝承は残っていませんが、広常の遺領を継いだ上総千葉氏の本拠であることから、元々は広常の居城だったのではないか、と推測されています。近くに「大谷木」という「大柳」と音が一致する大字が残っていること、玉前神社の所在する玉前荘の範囲内であることなどから現在では広常の居城跡の最有力候補地です。

ただ、現在大柳館跡とされる台地上が同館の推定地として正しいのか、というと疑問が残ります。というのも、『吾妻鏡』によれば大柳館の炎上の際、「数十宇舎屋、同時放火」したと記されています。つまり、数十の建物が大柳館に付随していた、と推測され、現在の推定地ではあまりにも狭すぎます。（ちなみに、この数十の建物があったという記述から、上総千葉氏の代のみで城下が発展したとは考えづらく、それ以前広常が居城としていたからこそ、これだけの建物が建ち並んでいたのでは、という推測もできます）

つまり、広常の居城は大柳館であろうが、現在同館跡と推定されている場所ではないだろう、というのが現在の説です。

では、大柳館はどこだったのか。実は発掘調査がされていないため、明確な場所は特定できません。候補としては現在の大柳館跡の推定地の麓、川に面した低地が考えられます。今後の調査研究の進展に期待です。

▲現在の大柳館跡（推定地）（睦沢町北山田3）

（学芸員　江澤一樹）

【問合せ】教育課　☎（42）1416